

むかしの薩摩人は概して無口である。

—— 議を云うな

というお国柄から、不言実行をよしとする。また、自慢話を嫌う傾向がある。それを美風として称賛する人もいるが、歴史を学ぶ者にとっては困ったことでもある。たとえば戊辰戦争に関して、山県有朋が自伝的著作「越の山風」を遺したのに対し、大山巖は無題の自伝を書きかけたまま、ついに完成させることがなかった。

大山巖は私の曾祖父ではあるが、一度とて顔を合わせたわけではなく、日頃は単に歴史上の人物として考えるようにしている。

血縁からくる主観を排したうえで、二個の歴史家として思うのは、世上いわれる天性のゼネラリストという評価は妥当でないということだ。

—— 大将になるために生まれて来たような男

ある作家が、大山巖をそのように表現した。そして、その印象は一般の人のみ

ならず、研究者にも広まっている。だが公刊伝記を読めば、それが多分に誤解を含んだ評価だとわかるだろう。

公刊伝記において着目すべきことは、人格形成の過程である。

若き日の大山弥介は、砲術家の子でありながら、あえて槍術を学ぶという時代錯誤的な面を見せている。それが薩英戦争をきっかけに洋式兵学を学ぶようになった。

薩摩には合伝流という火力重視の兵学があり、伊地知正治や村田経芳、西郷従道などが学んでいる。その合伝流の系統に大山巖は属しておらず、あくまで高島流江川塾の系統に属していると見るべきだ。兵学に関して、大山巖は薩摩の流儀ではないのだ。

以後は建軍期に至るまで技術士官の道を進んでおり、部隊指揮官として実戦を経験してはいるが、むしろ統帥に関しては専門外と考えていい。

明治六年政変以来、多くの人材を失った陸軍は、砲術のスペシャリストであった大山巖にゼネラリストへの転身を求めた。そして、求められるまま指揮官にもなり、軍政官にもなった。果ては文部大臣など陸軍大臣以外での閣僚も経験している。

茫洋たる大器

などという評は、すべて後半生の業績からくるものだといえよう。

公刊伝記を読めば、大山巖が前半生において、ややもすれば軽率とも思えるほど快活な人であったことがわかる。つまり、どっしりと重みのある指導者としての資質は天性のものではない。むしろ後天的に習得したものであると考えるべきだろう。

いかにして大器と評される資質を獲得したか、残念ながら大山巖が自ら語ることはなかった。いま、それを知る術は公刊伝記を精読するほかないだろう。

公式記録と、周囲の人々の記憶をもとに綴られた公刊伝記は、大山巖の人格形成を辿るうえで、ほとんど唯一の手がかりである。というのは、関東大震災と第二次大戦の空襲によって、公的機関に預けた以外の記録類の一切が失われているからである。

私が幼い頃、祖父から伝え聞いた大山巖のことごとくも、ほぼすべて公刊伝記に記された範囲のことではない。

そうした事情から、公刊伝記の覆刻は実に意義深いことである。その行間に埋もれている大山巖の真の人物像を、多くの人に探って頂くことを期待したい。

限定三百部復刻

幕末から日清・日露戦に到る波瀾の生涯を詳述した
決定版伝記 七十八年ぶりに初復刻！



元帥公爵大山巖



マンロ書房



『元帥公爵大山巖』を推す

軍事テクノクラートの面目躍如

作家 桐野作人

大山巖（一八四二～一九一六）といえば、西郷隆盛の従弟、弥介砲の発明者、日露戦争での満洲軍総司令官といった面がすぐ思い浮かぶ。

それらは大山の断面を示しているが、もちろんすべてではない。本書は質量ともに大山の伝記にふさわしい一冊である。量はなんととってもそのボリュームである。本巻のほか附図・附表と年譜も付いている。

本編は千頁近くもある（構成内容は後述）。附図・附表は三十枚（うち附表は一枚）もある。薩英戦争、鳥羽伏見の戦いと戊辰戦争、西南戦争、日清戦争、日露戦争（満洲軍の陸戦）と大山が参戦したすべての戦いが網羅されている。また年譜も侮れない。通常、年譜は巻末に簡略なものが付いていることが多いが、本書では別冊になっており、総頁数は六百三十頁という精細で膨大なもの。しかも、すべての項目に出典が付してある。これほど立派な年譜はいまだかつて見たことがない。

本書は大山元帥伝編纂委員の手になるもので、代表者は尾野実信（一八六五～一九四六、陸軍大将）。尾野は日露戦争期をはじめ、長く大山の元帥副官を勤め、大山の人となりをもっともよく知る人である。しかし、尾野が実際の編纂業務を担当したわけではない。この膨大な伝記を編むにあたり、もっとも時間と手間を労したのは史料蒐集と関係者への取材であろう。その任にあたったのは、尾野の序文に名前が挙げられている猪谷宗五郎だと思われる。猪谷はこれに先立ち、大山と同郷の松方正義の伝記『侯爵松方正義卿実記』（中村徳五郎編纂、現在『松方正義関係文書』一～五所収）の編纂にも加わった経歴もあることから、その手腕が本書の史料蒐集でも十二分に発揮されている。

それでは、本編の特徴や注目すべき点について、いくつか述べてみたい。

まず、本書には大山が生まれ育った当時の下加治屋町の見取り図が掲載されていることである。大山は鹿児島城下でも下級城下士の居住区域である下加治屋町に生まれた。わずか七十数戸の町内に従兄弟の西郷隆盛・従道兄弟をはじめ、大久保利通、村田新八、東郷平八郎（連合艦隊司令長官）、黒木為楨（第一軍司令官）などが住んでいた。この一帯はまさしく維新と明治の揺籃の地といっても過言ではない。

この有名な町内すべての家と家長の名前が書き出されており、とても貴重な記録である。（『大久保利通文書』第十巻にも類似の見取り図あり）

第二に寺田屋事件である。大山はのちの日露戦争で満洲軍総司令官をつとめ、どのような苦境にも動じない、茫洋とした将帥のイメージが強いが、若き大山は当時の攘夷青年がそうだったように、血気盛んな尊王攘夷の行動派だった。その最たるものが寺田屋事件である。有馬新七など九人が犠牲になったが、寺田屋二階には二十人以上の薩摩藩有志が集結しており、そのなかには大山巖のほか、いとこの西郷従道、篠原国幹、三島通庸、伊集院兼寛、永山弥一郎などもいた。帰順した大山らは鹿児島に強制送還され、一時謹慎処分となっている。大山の原点は過激な尊攘派だったことがわかる。また寺田屋事件は、島津久光の命による「上意討ち」という評価に対して、近年、孝明天皇の「浪士鎮撫」の勅命があり、有馬らは「違勅」の罪によっても成敗されたという見方が強調されるようになってきた。すでに本書ではその見方に先行して、浪士鎮撫の勅命が紹介されている。先見の明というべきだろう。

第三に、大山と兵器との関わりである。大山といえば、自分の通称を冠した弥介砲が思い浮かぶくらい兵器への造詣が深い。本書でも、「兵器に関する貢献」という一章がわざわざ立てられている。大山は戊辰戦争で薩藩第二砲隊長をつとめている。大砲への思い入れはひとしお強かったのは、やはり薩英戦争での実戦経験だろう。大山はこのとき、弁天波止の砲台で敵弾が飛び交うなか、双肌脱ぎになって砲撃した。それでも、砲戦では英国艦隊に敗北したことが深く胸に刻まれたのでないか。

有名な弥介砲は十二斤綫白砲だが、それ以前の明治初年にフランス製の四斤山砲を改良して長四斤山砲を集成館で製造している。欧州留学時代にもスイスで発見した青銅砲の長所を活かすことを意見具申して採用されている。また明治陸軍において軍用小銃が不統一な状況を一新するため、村田経芳が考案した、いわゆる村田銃（十三年式、十八年式）を制式銃として採用している。なかでも特筆すべきは、二十八センチ榴弾砲である。これは旅順要塞と旅順艦隊の粉碎に威力を発揮したこと知られる。これも大山が海防費献金を使って製造した要塞砲で、日露戦争のときに旅順に

搬送されたもの。

こうしてみると、大山は数度にわたり陸軍大臣や参謀総長という軍政・統帥の最高両職を歴任しているが、その本領は意外と軍事技術の隅々にまで精通した軍事テクノクラートだったといえるかもしれない。その一方で、日露戦争で見せた悠揚迫らぬ将帥ぶりとはあまりに対照的である。そこにこそ、大山という人物の奥行きの高さを見る思いがする。本書でも、大山をよく知る元勲、政治家、軍人の後輩・部下などの大山評がそのことをよく物語る。

そのほか、明治六年（一八七三）の征韓論によって西郷隆盛が下野してから、薩摩閥は分裂したが、とくに大久保利通が西郷の復帰を熱望しており、その大任が大山に与えられた一件などは興味深い。さらに「君が代」選定にあたり、大山が薩摩琵琶歌「蓬萊山」から歌詞を採ったという逸話、欧州兵制の視察、日清・日露の両戦役、その他界と国葬など、興味深い逸話が満載である。

逸話を二、三紹介する。大山は射撃の名手だったという。屋敷の庭に無花果の樹があり、その実が熟すと鳥がやってくる。猟銃で両手射ちすれば、鳥が気づいてすぐ逃げるので、大山は鳥に気づかれぬよう、あつという間に片手射ちで撃ち落としたという。いかにも銃器の扱いに手慣れた大山らしい。

大山の国葬当日、ロシア大使館付武官のヤホントフ少将が大山家を訪問して、全ロシア陸軍を代表して弔辞を述べ花環を贈呈した。

ロシア陸軍が日露戦争での日本側最高司令官に敬意を表しているのもまた敵味方の感情を超えた大山の人徳、衆望をうかがわせる。

大山とともに陸軍創設に関わり、薩長を代表する元勲だった山県有朋はその死を悼んで挽歌を手向けている。「大山のくづれし音はうちつけに老が胸をばつらぬきにけり」

大隈重信は、大山が家族思いで、夕方、懐中時計を見て夕食の時刻になれば、大急ぎで帰宅したというユーモラスな逸話を述べている。大山が後妻に会津出身の山川捨松を迎えたのは有名な話。幕末維新期には宿敵同士だった薩会の結婚は実現するまでに一悶着あったが、大山は愛妻家だったという。しかし、本書では家族生活のことがあまり具体的に触れられていないのが残念である。その代わり、家族写真は豊富に掲載されていて、その一端がうかがえる。

本書は随所に大山の書簡をはじめとした史料を転載してある。伝記特有の顕彰的な側面のみならず、大山や明治陸軍を知りうる好個で実証的な記録でもある。古書市場でも入手しにくい本書をマツノ書店が覆刻するのは、まことに時宜にかなった英断だと考える。広く読まれることを期待したい。

略目次

第十四章 明治十年役

一 陸軍省第一局長と熊本鎮台司令官の兼任

二 私学校党の勃発と陸軍卿代理の元帥

三 元帥の出征と田原の戦闘

四 別働第五旅団司令長官たる元帥と熊本附近の掃蕩戦

五 鹿兒島方面の戦闘と軍団本営出張所に於ける元帥

六 都城方面の戦闘と別働第三旅団司令長官たる元帥

七 宮崎方面の戦闘と元帥の進軍

八 城山攻撃と攻城砲兵隊司令長官たる元帥

第十五章 参謀、陸軍卿、参謀本部長時代

一 海防及び兵備

二 徴兵事務に関する建議

三 軍人勅諭の下賜

四 朝鮮事変

五 兵制革新

第十六章 歐洲兵制視察

第十七章 陸軍大臣時代

第十八章 兵器に関する貢献

長四斤山砲／彌助砲／兵器の独立／造兵司掛／青銅砲／十三年式村田銃／七種野砲、同山砲／輻重兵器／遊就館／無煙火薬／防楯／野、山砲論／工兵隊供用器材／架橋器材／海岸砲／海防費御下賜金及び献金／二十八種榴彈砲／三十口径二十四種加農／隠頭砲架／村田連発銃／電話機／軍用鳩／二十

四種加農／機関銃／気球／中等口径速射砲／測遠機／武式砲外彈道学／二十八種榴彈砲昇降砲架／二十六年式拳銃／日清戦役と兵器／砲台鏡の曇り／大口径砲用隠頭砲架／西伯利鉄道／三十年式銃／三十一年式速射野、山砲

第十九章 明治二十七年、八年戦役

一 開戦の序幕

二 旅順半島の作戦と、金州、大連、旅順の攻略

三 遼河平原の作戦と蓋平、营口の占領

四 山東半島の作戦と威海衛の攻略

五 北洋水師の全滅

六 凱旋

七 金州城内桜樹の移植

八 清国軍人戦亡碑の建立

九 片仮名五十音の習字手本

十 劉雨田の帰化

第二十章 東宮御輔導時代

元帥府設置の詔勅

第二十一章 明治三十七、八年戦役

一 対露作戦の準備

二 大本営幕僚長としての作戦指導

開戦時に於ける作戦計画

画

一回攻撃

沙河会戦及び旅順要塞正攻法の開始

沙河対陣及び旅順要塞の攻略

日本軍の決戦準備及び黒溝台附近の会戦

奉天会戦

奉天会戦後に於ける満洲軍の行動

凱旋

参内復命

復命書

凱旋行軍と観迎会

凱旋大観兵式

凱旋大行軍

新宿御苑の賜宴

第二十二章 大山邸への行幸行啓

一 皇太后皇后両陛下の行啓

二 天皇陛下の行幸

観世音銅像の建設

三 皇太子殿下の行啓

第二十三章 戦後の大局

第二十四章 元勲、内大臣時代

一 大正政変

二 内大臣拜命

三 世界大戦と元老會議

四 即位の御大礼

五 内閣の交迭

第二十五章 国葬と銅像

一 国葬

二 銅像

第二十六章 高風余芳

一 国葬

二 銅像

第二十六章 高風余芳

一 国葬

二 銅像

第二十六章 高風余芳

一 国葬

第二十六章 高風余芳

一 国葬

二 銅像

第二十六章 高風余芳

一 国葬

二 銅像

第二十六章 高風余芳

一 国葬

二 銅像

第二十六章 高風余芳

一 国葬

二 銅像

第二十六章 高風余芳

一 国葬

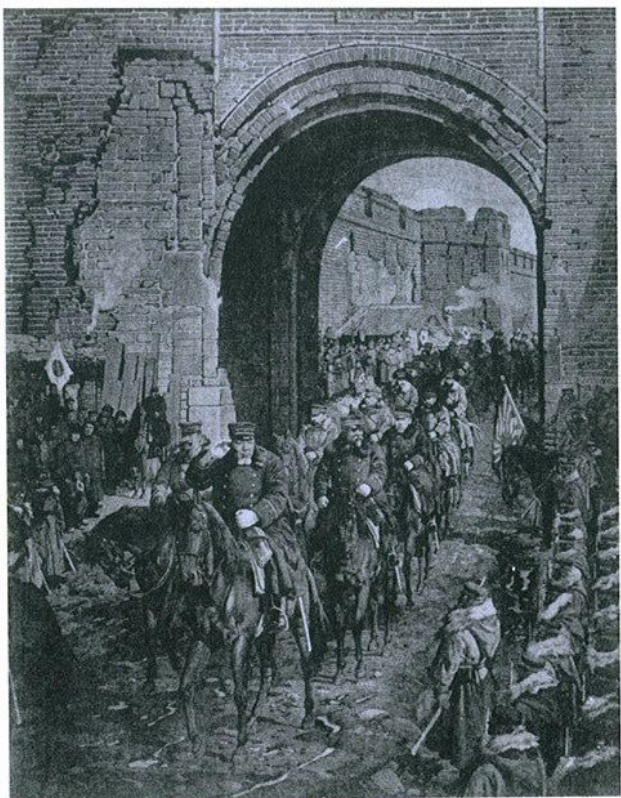
二 銅像

第二十六章 高風余芳

一 国葬

二 銅像

千頁中三百頁までが維新戦争!!



『元帥公爵大山巖』によせて

「一身ヲ以テ二身ノ如キ思」で明治日本を問い質す書

筑波大学名誉教授 大濱徹也

『元帥公爵大山巖』は、日露戦争（一九〇四～五年）三十年記念として、昭和十（一九三五）年に大山家が刊行したものです。大山巖は、山県有朋とともに日本陸軍の創設に力を尽くし、日清戦争の第二軍司令官・日露戦争で満洲軍総司令官として勝利をもたらし、国民的人気を博した将軍です。その存在感は元帥大山巖として広く知られています。しかし日露戦後から大正政変下、元勲にして内大臣となり、国政に一定の地歩を占めていたことには眼が向けられていません。

こうした大山巖の足跡は、明治という時代を大山巖に託して描いた児島襄の作品『大山巖』全五巻（一九七七～七八年）などがあるものの、いまだ十分に検証されていません。そこには、一軍人として己を律する公人たる世界とは別に、ヨーロッパ留学で身につけた一個人としては私人たる場を大切に生きようしていた近代人大山巖の相貌を時代に位置づける困惑があるのではないのでしょうか。

このような相貌こそは、大山元帥伝編纂委員長の陸軍大將尾野實信をして、「序」で「元帥の謙讓、寡黙、宏量大度の人格者たりしことは、世人己に知る所」と評さしめたものです。ここに描かれた「大山巖伝」は、公人たる大山巖が幕末維新の激闘を一介の武弁として生き抜き、普仏戦争を觀戦、「兵器の独立は国家の独立」との強き思いを胸に国軍建設にかかわり、ヨーロッパで文明の何たるかを実感、兄と慕った西郷隆盛を西南戦争で亡ぼし、国軍の確立に努め、日清・日露戦争に如何に臨んだかを詳細に大山家の記録などで詳述しており、明治建軍史の趣を呈しています。まさに本書は、大山巖をとおして読みとる日本軍事史であり、戦争史ともいふべきものです。その構成は、勤皇討幕に奔る幕末動乱から戊辰戦争までが三百頁余、全体の三分の一を占め、西南戦争まででほぼ半分の頁を費やしています。ここには己が人生を凝視する大山巖の眼が強く投影されて

います。

大山巖は、明治十二年春に起筆した「大山巖自叙履歴」で、その思いを「自序」に認めています。

予ハ自ラ予カ一世ノ歴史ヲ書テ聊カ記憶ニ供セント欲ス、是ヲ人ニ示スニアラス、予カ如キ一世ニシテ二世ヲ見ルカ如キノ世涉リタルハ古人歴史ト雖モ未タ嘗テ不聞所ナリ、今日の考ヘヲ以テ昔日ノ事ヲ思ヘハ予カ一身ヲ以テ二身ノ如キ思ヲ成セリ、只恨ラクハ予カ筆ヲ執ル拙クシテ十分ノ意ヲ盡ス事不能干時明治十二年春ヨリ始ム

大山は、西南戦争で従兄西郷隆盛を討ったことで己の人生に幕を閉じ、「一世ニシテ二世ヲ見ル」「一身ヲ以テ二身ノ如キ思」で、国軍確立を己の天命とみなすことで新たな人生が生きられたのです。「大山巖伝」は、こうした生涯を公人たる足跡にたどり、時代の波濤を一身に引き受けて生きる大山巖の相貌を提示しています。そこには、幕末維新时期を苛烈なまでに討幕で邁進し、果敢に状況を切り開く若き大山の姿が読みとれます。精忠組から寺田屋へ、そして戊辰内乱の全過程が戦闘状況の詳細な記述によって提示されており、「相楽一件」として、相楽総三らが処断される一こまをはじめ、戦場での傷病兵への英国人医師による治療活動に道をひらいたこと、「君が代」を国歌としたことを紹介するなど、幕末維新史の奥を垣間見せてくれます。西南戦争前夜には、ヨーロッパでの生活を打ち切って帰国させられ、鹿児島に福沢諭吉の著書を送るなどして出京をうながす大山の苦悩など、明治の闇を読み解く素材にふれることができます。

本伝記は、戊辰内乱から日清・日露戦争の戦史を詳細に検証するのみならず、元老として国政に参与し、日露戦争後に激動していく政治をきわめて冷静に凝視し、内大臣として大正の幕開けに歩をつけていく姿を淡々と記しています。そこには、第三者の眼で政治の激流に対処した姿がうかがえ、大正という時代を再検証する眼が提示されています。まさに『元帥公爵大山巖』は、大山家の記録をはじめ関係資料によって、近代日本の軍事と政治を正面から描いた作品として、日本近代史を「一身ヲ以テ二身ノ如キ思」で生きた特異なる人間の眼で問い質す恰好の作品として、現在あらためて読み、明治という時代を体験したいものです。

あまりにも膨大すぎて、
初版以来80年近く、
どこからも復刻されなかった名著
ここにようやく刊行

■体裁 上製箱入 A5判 一千頁

■定価 三万円（税込・円別）

■予約特価 二万五千円（税・円共）

■特価締切 24年9月末日（厳守）

■発売開始 24年11月上旬

限定二百部（番号入）

▼書店不卸 ▼締切厳守 ▼返本OK

山口県周南市銀座2-13

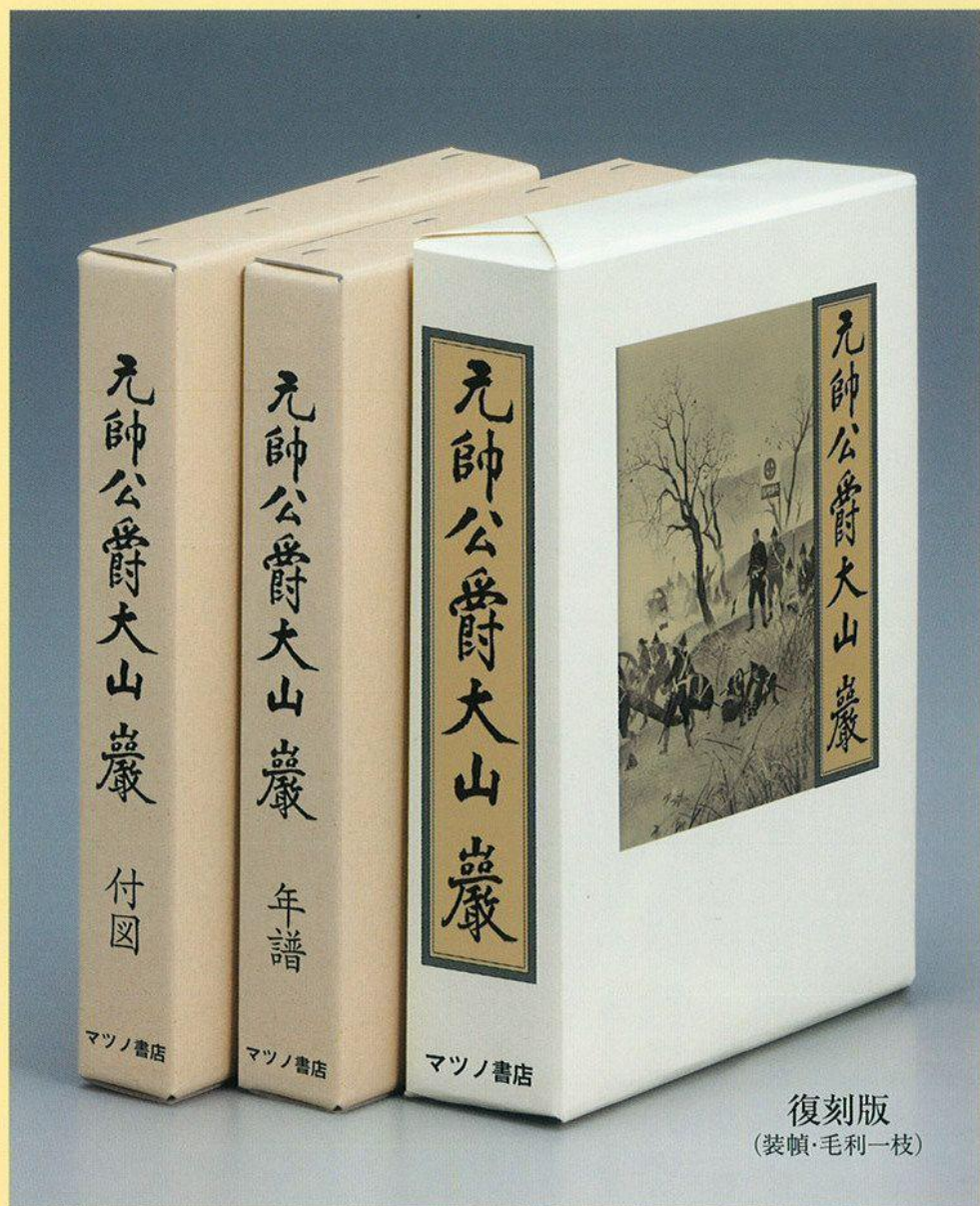
☎083422195

マツノ書店

URL <http://www.matuno.com>

内容見本

『元帥公爵大山巖』は「年譜」と「付図」つきです



復刻版
(装幀・毛利一校)



本書別冊「付図」について

曾孫・文筆業 大山 格

本書の特徴は、伝記に二九枚も色刷りの付図がついていることである。とりわけ、戊辰戦争に関する二一枚の作戦図は他書には無いものが含まれていて貴重である。そのみかすべての地図が綴じ込みでなく別刷のため、利便性が高く本文との対照も容易なのは嬉しいところである。

内容を見ると、旧陸軍が用いた軍隊符号に準拠して各部隊が示されている。現在、ひろく用いられているNATO式の軍隊符号に馴染んだ人は、最初とまどうかもしれないが、すぐに馴れることだろう。ことに戊辰戦争までは騎兵部隊が存在せず、歩兵のほかには若干の砲兵があるばかりだから、特に注記されていないかぎり歩兵と見なすことが出来る。ただし、戊辰戦争ではその部隊が属する藩名と、薩摩藩の部隊にあつては隊号が独特の記号で表されている。

それについては附表「明治戊辰役巻末附図軍隊符号便覧」で説明されているが、なお戸惑う人もあろうかと思われるので、今回の覆刻にあたって自作の「解説例図」を一枚加えさせて頂いた。

また、他の特徴としては、戦闘の状況を説明するために必要な場合のみ等高線が記されており、地形に関しては簡潔にして要を得たものになっている。

これらの特徴は、大山巖の後嗣である大山柏による『戊辰役戦史』の挿図に受け継がれており、ことに本書の付図で独特の軍隊符号を見覚えておけば、『戊辰役戦史』を読むとき、その知識は必ず役立つこととなるだろう。

旧版の付図は薄紙なので取り扱いに注意を要したが、復刻版では殆ど原寸大のA3判で、原本よりはるかに厚く丈夫な紙になるとのこと。誤って破る心配をせずに広げることが出来るので、すでに旧版を持っている人でも復刻版が欲しくなることだろう。

本書別冊「年譜」のこと

戦史研究家 長南政義

『元帥公爵大山巖』は、伝記本体もさることながら、630頁に及ぶ詳細な「年譜」の史料価値も高い。各頁を上下半分に分割して上段は単なる戦況や世情の動きのみならず陸軍の建軍史年表ともいえる内容を持っており、下段は大山に関する事項を根拠史料を明記し記載する形をとっている。

さて「年譜」の内容がどれほど正確なのかを「大山巖関係文書」（国会図書館憲政資料室寄託）所収の「日記」の記述と「年譜」の記載とを比較してみたい。

明治37年10月10日、沙河会戦開始当日の「年譜」の記載には「午前7時遼陽発、羅大台南方の一村落に宿営す。同地の山上より観戦す」とある。

一方「日記」そのものは「今朝七時遼陽を出て羅大台の南方の一村落に宿営す。未明より諸方に戦争始り終日同地の山上に在りて観戦す」となっているのである。

つまり「年譜」は「日記」の記載事項から煩雑な箇所を削除し、大山の動向を知るために必要な情報のみを簡明に要約した内容となっており、「年譜」だけでも膨大な「日記」の記載内容のおおよそを把握できる優れた編纂となっている。

また「年譜」の明治37年の記載には「日記」が頻繁に典拠として使用され、日々の動向が細かく書かれているが、同38年の下段の典拠史料は大山家書類がほとんどで「日記」の記載は見当たらない上、空白部分が多い。これは単に、明治38年の「日記」はあつても記載が無いということに他ならない。このことは本書の記述が厳密な史料考証を経てなされたことを物語っている。

戦前に刊行された数多くの優れた伝記には、年譜がついていたとしても十数頁程度のものがほとんどで、本書のように対象となる人物の日々の動きを史料で克明に追った詳細な「年譜」を別冊に持つ伝記は皆無に近い。

筆者も昨年「日本の活国宝 大山巖」（坂の上の雲5つの疑問）並木書房、平成23年）を執筆した際、本書を活用した。

伝記本体もさることながら、他に比類のないこの個性的な「年譜」をぜひこの機会にお手元に置かれることをお勧めしたい。

みて、之に火を點じたるを廊下に立つることゝし、今しも其の竹の伐り揃へられたる折も折、俄に階下に斬合が始まつた。

それは大山格之助等九人の鎮使が、既に寺田屋に乗込んで、主謀者と目せらるゝ有馬新七、柴山愛次郎、田中謙助、橋口壯助の四人を階下に招き、論すに久光公の命を以てし、暴舉を中止せよと説き、有馬等は事茲に及んでは斷乎として義舉の外なしと答へ、双方激論の結果、誰とは知らず、今は是非もなしと言ふや否や、道島五郎兵衛は「御上意でござる」と大喝一聲、刀を抜いて田中謙助に斬り付け、茲に双方の亂闘となつた。此の騒ぎに弟子丸龍助と橋口傳藏とは、二階より降り來つて、龍助は鎮使と斬り結び、傳藏は降るに際し足を拂はれて殞れ、西田直五郎と森山新五左衛門は、厠よりの歸るさに此騒動に會して闘ひ、有馬新七は其の刀折れて脇差を抜くに違なく、道島五郎兵衛を兩手に擁して壁に押し付け、二人共に刺せと叫んで、傍に居合はせたる橋口吉之丞の刺す處となつて無残にも斃れ、柴山愛次郎は思ふ仔細あつて、是より先愛次郎人に向つて言ふ、若し上使打ちに際すれば、自分には抵抗せず甘んじて處分を受けると。刀を二階に置き、無腰にて其の儘斬り伏せられ、橋口壯助は肩先より斜に乳にかけて斬り下され、倒れながら傍に闘ひ居たる鎮使の奈良原喜八郎に向つて末期の水を求め、喜八郎之を諾して與ふれば、後は宜しく頼むと言ひ残り、其の水を飲んで絶命した。傳へて以て美談としてゐる。田中謙助と森山新五左衛門は、重傷ながら息絶えざりしも、翌

寺田屋事件

慶應元年

慶應元年 乙

皇紀二五二五年
西曆一八六五年

二十四歳

(元治二年四月七日改元)

正月 二日 高杉晋作(東行)舉兵す。

(防長開天史)

十四日 三條實美等五卿、筑前に移る。(三條實美公肥)

(自叙)

二十四日 江川塾歸塾。

(江川塾傳)

四月 十三日 將軍家茂、親ら將ミして、長州再征の師を起す。

(七年史)

長州に使し、長州侯始め木戸孝允、廣澤真臣、高杉晋作諸氏ミ會す。夫より太宰府に三條公を訪ふ。(自叙)

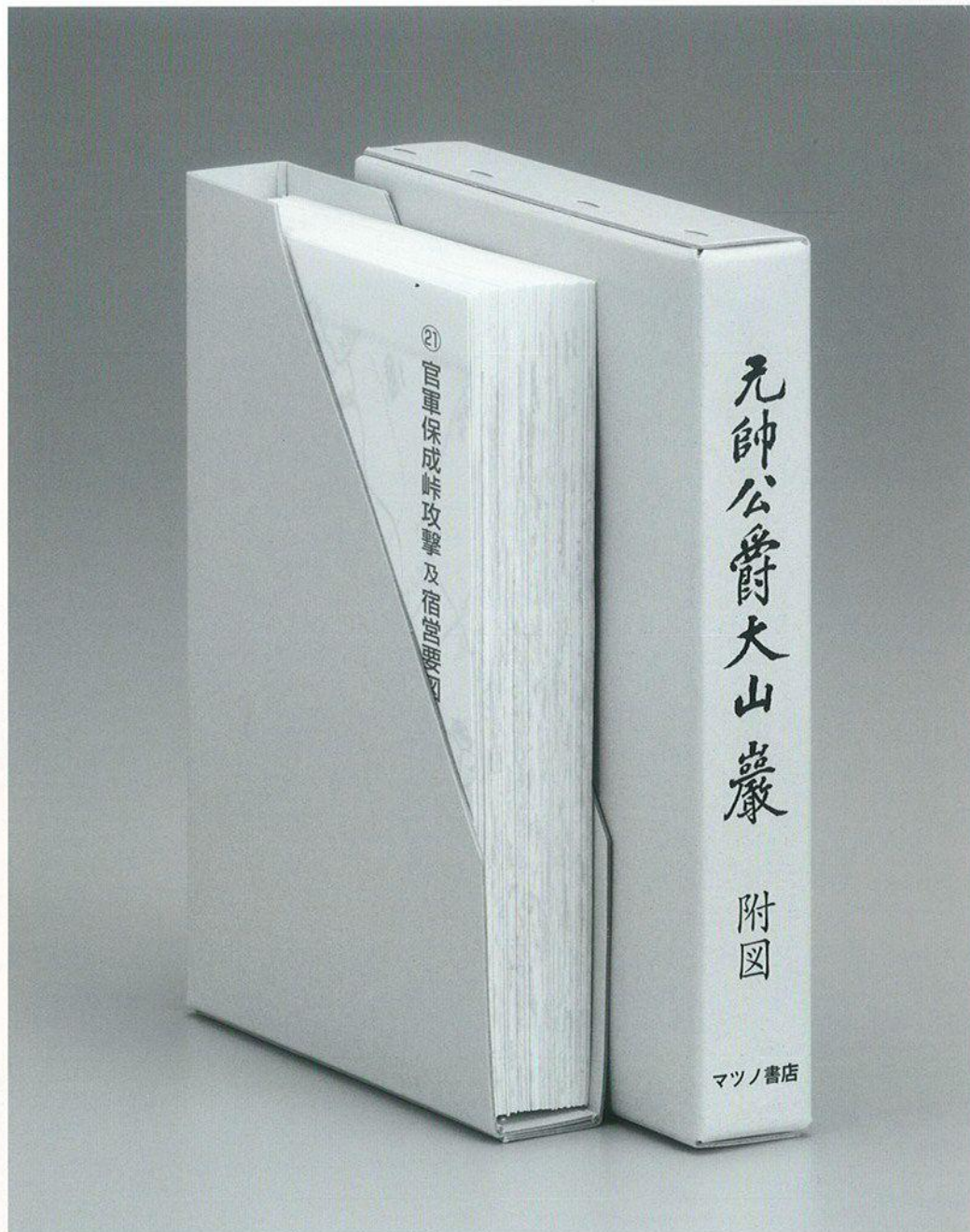
閏五月 一日 坂本龍馬、馬關に於て桂小五郎(木戸孝允)ミ會し、薩長聯合の策を説く。

(大久保利達傳)

■千頁に及ぶ「伝記」も六三〇頁の「年譜」も、全頁がこの上なく洗練された、簡潔明瞭な文章で書かれており、ただ一頁だけを選ぶことは不可能です。
これは本文のレイアウト見本、つまり読みやすさの目安とでも思つて下さい。

逃走ス而シテ二本松城下ニ滞留スル二十余日其時諸軍策ヲ決シテ會津ニ向フホナリ峠ヨリ進ム峠上ニ関門及砲臺アリ諸軍進テ砲臺ヲ取ル其夜峠ニ露營シテ翌日猪苗代ニ至ル時ニ先鋒隊十六橋ヲ渡リテ苦戦スルトノ事聞ヘケレハ夕景ヨリ予馬上ニテ十六橋迄五里ノ道ヲ至レハ我軍既ニ十六橋ヲ渡テ更ニ敵ノ襲来スルノ様子ヲ不見予ハ其夜再ヒ猪苗代ニ歸ル其日初メテ取タル敵地ヲ只一人深更ニ及テ猪苗代ニ歸レリ翌八月廿三日未明猪苗代ヲ出テ直ニ若松城下ニ至ル官軍嚴シク攻撃スト云共敵死力ヲ盡シテ防戦シ我軍死傷殊ニ多シ夕景予モ大手門前ニテ右ノ股ヲ射貫セラレ病院ニ送ラル翌日傷者数名ト共ニ三春ノ本病院ニ送ラル此途中戸板ニ乗り再ヒホナリ峠ヲ越シテ三日ニシテ三春ニ達ス苦痛実ニ言可ラス三春病院ニ在ル二十余日少シク癒ルニ因テ九月廿一日三春ヲ出テ再ヒ若松ニ行ク途中中山道ニテ若松ハ既ニ落城シテ予隊モ白川ニ出テ、帰ルノ報ヲ得テ途中ヨリ引返シ本街道ヨリ白川ニ出テ我力隊

「大山巖自叙履歴」九頁目（A5判十頁未完絶筆本）
家伝の謄写版刷り流布本を基に自筆原本と照合の上、大山格氏
校注により平成二十年十二月三十日、日本史探偵団より発行。
■これはとりあえず旧版ですが、復刻版にはいま作成中の「改訂
版」を使用します。



■復刻に際して、すべての地図をA3判に統一し、とても扱いやすくなると同時に紙質をやや厚く、永年の使用に堪えるようにしました。

■問題は、かさばる地図の収納法です。

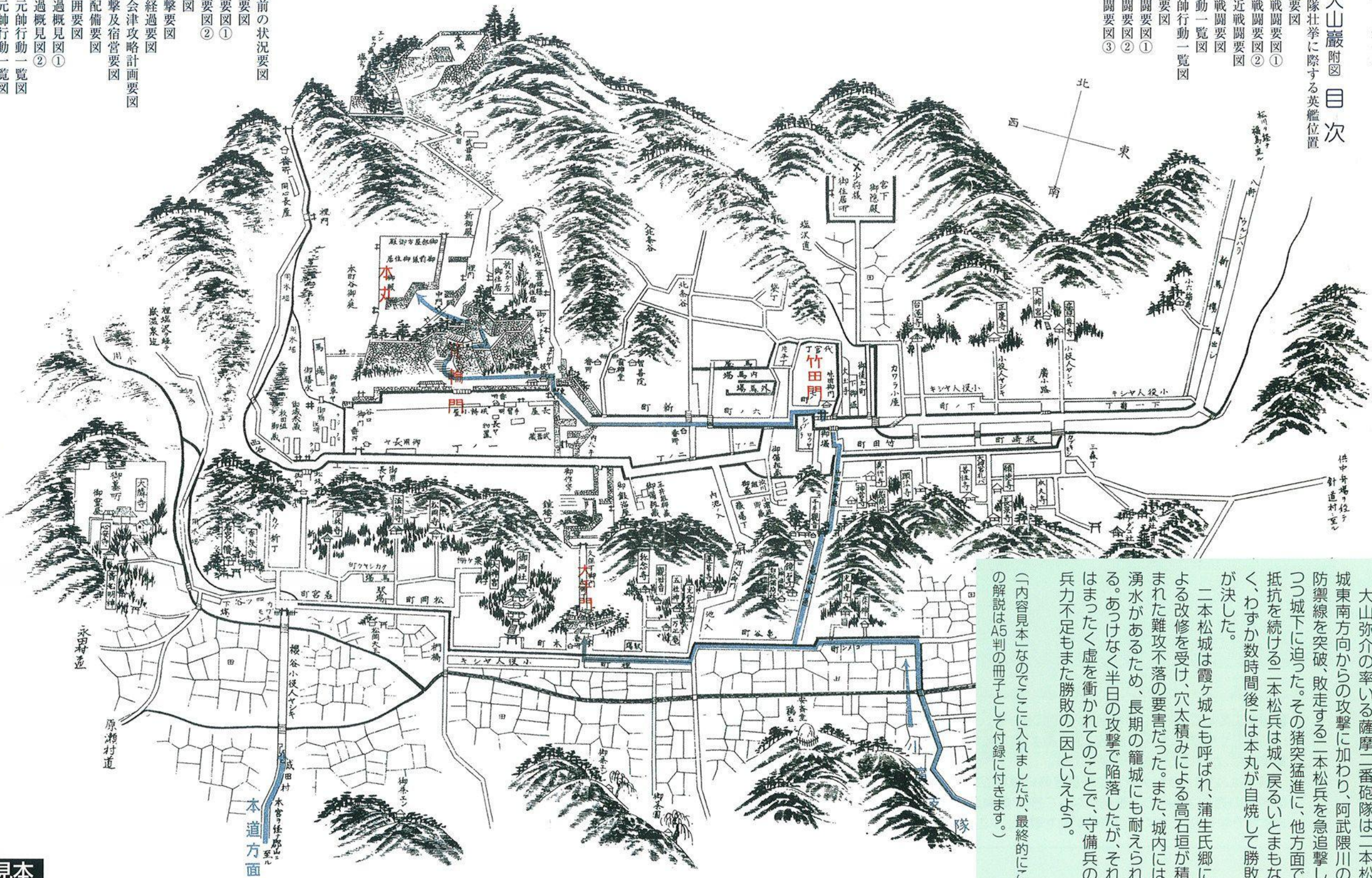
原本は、さまざまな大きさの地図を帙に重ねてあるだけでしたが、今回はこの写真の通り、A5版の二重箱になっており、外側から番号が見えるので、そのまま指でなぞれば、すぐに目的の地図を取り出すことができます。 マツノ書店

元帥公爵大山巖附圖 目次

- 薩英戦争決死隊壯挙に際する英艦位置
- 薩英戦闘經過要図
- 鳥羽伏見付近戦闘要図①
- 鳥羽伏見付近戦闘要図②
- 淀町富ノ森附近戦闘要図
- 八幡橋本附近戦闘要図
- 東山道官軍行動一覽図
- 明治戊辰役元帥行動一覽図
- 岩井附近戦闘要図
- 宇都宮附近戦闘要図①
- 宇都宮附近戦闘要図②
- 宇都宮附近戦闘要図③

二本松城突撃經過要圖

(明治戊辰七月二十九日)



大山弥介の率いる薩摩二番砲隊は二本松城東南方向からの攻撃に加わり、阿武隈川の防禦線を突破、敗走する二本松兵を急追撃しつつ城下に迫った。その猪突猛進に、他方面で抵抗を続ける二本松兵は城へ戻るとまもなく、わずか数時間後には本丸が自焼して勝敗が決した。

二本松城は霞ヶ城とも呼ばれ、蒲生氏郷による改修を受け、穴太積みによる高石垣が積まれた難攻不落の要害だった。また、城内には湧水があるため、長期の籠城にも耐えられる。あつげなく半日の攻撃で陥落したが、それはまったく虚を衝かれてのことで、守備兵の兵力不足もまた勝敗の二因といえよう。

(内容見本)なのでここに入れましたが、最終的にこの解説はA5判の冊子として付録に付きます。

- 白河の戦闘直前の状況要図
- 官軍白河攻撃要図
- 官軍白河防禦要図①
- 官軍白河防禦要図②
- 官軍平攻撃要図
- 官軍二本松攻撃要図
- 二本松城突撃經過要図
- 白河口方面軍会津攻略計画要図
- 官軍保成峠攻撃及宿営要図
- 若松附近兩軍配備要図
- 官軍若松城攻囲要図
- 十年役作戦經過概見図①
- 十年役作戦經過概見図②
- 旅順半島作戦元帥行動一覽図
- 山東半島作戦元帥行動一覽図
- 花園河口上陸地之略図(由比大尉)
- 満州軍方面作戦經過概見並元帥行動一覽図

この美しい絵図は縮小して複製版「年譜」の本体表紙にも使用されます。

内容見本 (85%縮小)